

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|------|------------------------------|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | 人文科学概論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 有馬 伊津子 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単 | 位 30 | 時間以上 |
| 使用教科書 | なし 適時プリント等を配布。 | | |
| 使用参考書 | 『改訂版 医療面接』（医道の日本社）『医療と社会』（盲学校…編纂委員会編） | | |
| 評価方法 | 前期、後期の2回の定期試験を実施し、その平均点を年間評価とする。（小数点以下は切り捨て） | | |
| 授業の概要 | 授業は利用者と講師とのやり取り（コミュニケーション）によって展開する。利用者の創作活動も取り入れる。利用者が自ら思考し、表現する活動も数多く取り入れたい。 | | |
| 授業の目的 | 人文科学諸分野の知識を深めるとともに、施術者として必要なコミュニケーション能力、及び、情報の適切な収集・処理に関する知識や技能を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | | 予定H |
| 前 期 （ 15 週） | | | 15 |
| (1) 人文科学諸分野の知識と技能 ア 日本語の特徴と機能 ウ 国文法と国語表現 エ 語彙 オ 言語生活 カ 日本文学と文学史 キ 古文と漢文 ケ 医療と日本語 など (2) コミュニケーションの知識と技能 ア コミュニケーションの基本 イ 接遇と待遇表現 ウ コミュニケーションと点字 など (3) 医療とコミュニケーション ア 施術者としての態度 イ 医療における接遇 など ○ 前期期末考査講評 | | | 5 6 3 1 |
| 後 期 （ 15 週） | | | 15 |
| (1) 人文科学諸分野の知識と技能 ア 日本語の特徴と機能 ウ 国文法と国語表現 エ 語彙 オ 言語生活 カ 日本文学と文学史 キ 古文と漢文 ケ 医療と日本語 など (2) コミュニケーションの知識と技能 ア コミュニケーションの基本 イ 接遇と待遇表現 オ 各種情報の収集・整理・活用・発信 など (3) 医療とコミュニケーション ア 施術者としての態度 イ 医療における接遇 ウ 医療面接理論 など ○ 後期期末考査講評 | | | 5 5 4 1 |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|--|---------------------------------|----|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | 社会科学概論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 村上 初枝 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単位 | 30 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | 社会福祉基礎 | | |
| 評価方法 | 前期、後期の2回の定期試験を実施し、その平均点を年間評価とする。（後期はレポート評価の場合あり） | | |
| 授業の概要 | 毎回、プリントを配布。日本や世界の社会福祉を見ていくことにより、社会保障制度のあり方を意識する。 | | |
| 授業の目的 | 社会保障制度を中心に生活をしていくうえでの課題や福祉を捉えて、現代社会をみていく。 | | |
| 自己学習の進め方 | 特に予習・復習の必要はないが、ニュースなどを参考にしながら現代社会にどのような問題があるのかを、意識することを心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（ 15 週） | | 15 | |
| 授業概要と自己紹介 社会福祉の理念と意義（生活と福祉） 日本の社会福祉の歴史 諸外国における社会保障（イギリス・北欧・アメリカ） 社会福祉六法 前期まとめ 前期期末試験返却 | | 1 3 2 3 4 1 1 | |
| 後 期（ 15 週） | | 15 | |
| 社会福祉六法、社会保険制度、公衆衛生 地域医療・地域福祉 これからの社会保障制度 後期まとめ 後期期末試験返却 | | 8 1 4 1 1 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|-------------|---|-------------|----|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | 自然科学概論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 小坂 昌博 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単位 | 30 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし(プリントを配布する) | | |
| 使用参考書 | | | |
| 評価方法 | 前期、後期の2回の定期試験を実施し、その平均点を年間評価とする。（小数点以下は切り捨て） | | |
| 授業の概要 | 1. 自然科学の考え方について考察し、科学的方法についての理解を深める。 2. 生物の物質的特徴および生命現象とは何かについて理解を深める。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な自然科学諸分野の基礎的知識を教授し、物事を科学的に判断し、解決する能力と態度を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 15 | |
| 1 | 授業の概要説明 | 1 | |
| 2 | 現象の法則の関係から、科学的アプローチの仕方を考察する。 ※ 遺伝現象の法則性 | 3 | |
| 3 | ものの形を記述するための数学 ※ ユークリッド幾何学と非ユークリッド幾何学 | 3 | |
| 4 | 原因がわかれば結果はすべてわかる？ ※ 光の粒子説、波動説 | 3 | |
| 5 | 自然現象の変化を定量的に読み取る ※ 微分法の考え方 | 3 | |
| 6 | 前期のまとめ | 2 | |
| 後 期（ 15 週） | | 15 | |
| 7 | 生物が外界からエネルギーを獲得する過程 ※ エネルギーの担い手、エネルギー物質とは ※ ATPの生成過程 ※ エネルギーの貯蔵 | 1 2 2 | |
| 8 | 生体を構成する物質が情報をもち、その情報を正しく子孫に伝える過程 ※ タンパク質の構造と働き ※ 酵素の構造と働き ※ 核酸の構造と働き | 2 2 1 | |
| 9 | 生体物質の変化と統合によって、調和のとれた生物体を構成する過程 ※ 酵素活性、酵素生産の調節 ※ 抗体 | 2 1 | |
| 10 | 後期のまとめ | 2 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|--------------------------------------|-------|
| 学 年 | 専門課程1年 | | |
| 授業科目 | 保健体育 | 授業方法 | 実技・講義 |
| 科目担当者 | 細川 健一郎 | | |
| 単位数・年間時間数 | 1 単位 | 30 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点もって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て） | | |
| 授業の概要 | <ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害を配慮した運動・スポーツについて講義・実技を通して理解する。 ・健康と運動の関係について理解し、日常的な運動の実践につながる知識・技能を習得する。 ・スポーツ傷害について理解する。 | | |
| 授業の目的 | <p>施術者として必要な健康・安全や身体運動について教授し、健康の保持増進のための運動を実践させ、これを施術に応用する能力と態度を修得する。</p> | | |
| 自己学習の進め方 | <p>毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。</p> | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（ 15 週） | | 15 | |
| (1) 体づくり運動 (2) 陸上競技 (3) 球技 (4) レクリエーションゲーム (5) 体育理論 (6) 保健理論 (7) スポーツ傷害 (8) その他のスポーツ *内容決定についての補足事項 内容については、上記内容を原則とするが、単位数、人数、年齢、性別、障害の程度、健康状態を配慮することに加え、施設や設備などの状況により決定する。 | | 3 3 2 1 3 3 0 0 | |
| 後 期（ 15 週） | | 15 | |
| (1) 体づくり運動 (2) 陸上競技 (3) 球技 (4) レクリエーションゲーム (5) 体育理論 (6) 保健理論 (7) スポーツ傷害 (8) その他のスポーツ *内容決定についての補足事項 内容については、上記内容を原則とするが、単位数、人数、年齢、性別、障害の程度、健康状態を配慮することに加え、施設や設備などの状況により決定する。 | | 6 0 6 0 0 0 2 1 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|--|---------------|----|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | 解剖学 I | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 米田 裕和 | | |
| 単位数・年間時間数 | 4 単 位 | 120 時 間 | 以上 |
| 使用教科書 | 人体の構造と機能 解剖学 (第2版 第14刷) | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期(中間・期末)、後期(中間・期末)の年4回の総括的評価を実施する。また、学年末成績は、各期の評価の相加平均とする。(小数点以下は切り捨て) | | |
| 授業の概要 | 講義と模型観察を行う。各授業では、事前に課題を提示し、教科書予習、授業後のフィードバックを課す。各単元の授業後に確認テストを行う。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な人体諸器官の位置・形態・構造について学習し、これを施術に応用する能力と態度を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の予習と復習に重点を置き、各単元の開始前に教科書の学習のポイントを確認する。また、事前に授業内容を教科書で確認し、授業に臨む。受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容 (計 画) | | 予 定 H | |
| 前 期 (15 週) | | 60 | |
| (1) 解剖学の基礎 ア 解剖学の意義と分類 イ 人体の構成 ウ 解剖学的用語 エ 人体の方向と運動 (2) 運動器系①骨格系 ア 骨の一般 イ 頭蓋 ウ 脊柱 エ 胸部 オ 上肢の骨 カ 下肢の骨 キ 骨盤 ク 骨の連結 ケ 人体各部の主要関節 コ 各関節の運動 (3) 運動器系②筋系 ア 筋の一般 | | 10 46 4 | |
| 後 期 (15 週) | | 60 | |
| (3) 運動器系②筋系 イ 頭部の筋 ウ 頸筋 エ 胸筋 オ 腹筋 カ 背筋 キ 体幹の筋と運動 ク 上肢の筋 ケ 上肢の筋と運動 コ 下肢の筋 サ 下肢の筋と運動 (4) 基礎運動学 ア 運動の基礎 (てこと滑車) イ 体の重心と姿勢 (5) 神経系 ア 神経系の構成 イ 中枢神経系 ウ 末梢神経系 エ 伝導路 | | 28 4 28 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| 学 年 | 専門課程 1 年 | | | | | | | | | | |
|---------------|--|-------|------|------|-------------|------|------|----|----|-------|----|
| 授業科目 | 解剖学Ⅱ | 授業方法 | 講義 | | | | | | | | |
| 科目担当者 | 水沼 健生 | | | | | | | | | | |
| 単位数・年間時間数 | 3 | 単位 90 | 時間以上 | | | | | | | | |
| 使用教科書 | 人体の構造と機能 解剖学 | | | | | | | | | | |
| 使用参考書 | 解剖学講義 | | | | | | | | | | |
| 評価方法 | 前期(中間・期末)、後期(中間・期末)の年4回の総括的評価を実施する。また、学年末成績は、各期の評価の相加重平均とする。(小数点以下は切り捨て) | | | | | | | | | | |
| 授業の概要 | 循環器系・呼吸器系・消化器系・泌尿器系・生殖器系・内分泌系・感覚器系について、各種模型などを使用しながら実施する | | | | | | | | | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な人体諸器官の位置・形態・構造について学習し、これを施術に応用する能力を習得する。 | | | | | | | | | | |
| 自己学習の進め方 | 分からない箇所については積み残さないように、毎授業後に復習を行い自身の記憶度や理解度を確認する。 | | | | | | | | | | |
| 授 業 内 容 (計 画) | | | 予定H | | | | | | | | |
| 前 期 (15 週) | | | 45 | | | | | | | | |
| 1. 循環器系 | 血管系 (総論) | 心臓 | 動脈系 | 胎児循環 | リンパ系 | リンパ管 | リンパ節 | 脾臓 | 胸腺 | 血液と血球 | 25 |
| 2. 呼吸器系 | 鼻腔 | 副鼻腔 | 咽頭 | 喉頭 | 気管と気管支 | 肺 | 8 | | | | |
| 3. 消化器系 | 口腔 | 咽頭 | 食道 | 胃 | 小腸 | 大腸 | 肝臓 | 胆嚢 | 脾臓 | 12 | |
| 後 期 (15 週) | | | 45 | | | | | | | | |
| 4. 泌尿器系 | 腎臓 | 尿管 | 8 | | | | | | | | |
| 5. 生殖器系 | 男性生殖器 | 女性生殖器 | 8 | | | | | | | | |
| 6. 内分泌系 | 下垂体 | 松果体 | 上皮小体 | 副腎 | 膵臓のランゲルハンス島 | 7 | | | | | |
| 7. 感覚器系 | 視覚器 | 平衡聴覚器 | 味覚器 | 嗅覚器 | 皮膚 | 18 | | | | | |
| 8. 国試過去問 | | | | | | 4 | | | | | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|--|------------------------|------|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | 生理学 I | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 森定 真 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 | 単位 60 | 時間以上 |
| 使用教科書 | 生理学 東洋療法学校協会編 | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点もって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確認するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | この科目では人体の正常な機能について学びます。生体を構成する細胞の働きや、循環、呼吸、消化吸収、代謝、体温、排泄の仕組みについて理解することは、医学的な専門科目を学ぶ上での基礎となり、人の健康に携わる施術師にとって非常に重要な科目であります。 | | |
| 授業の目的 | 学習した内容を施術に応用する能力と態度を養い、科学的根拠のある医療、サービスの提供を実現することを目標とします。 | | |
| 自己学習の進め方 | 1. 復習は配布資料を精読して、内容の理解に努めて下さい。理解できないところがあれば、教科書を調べ、それでも解決できなければ、次の講義までに担当教官に質問し確認して下さい。 2. 受験対策として講義の最後に提示した確認問題は必ず解くようにしておいて下さい。学習の要点が分かり、講義への理解が深まります。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 30 | |
| 1. オリエンテーション 2. 生理学の基礎 3. 循環 4. 呼吸 5. 国試対策（演習問題の実施、模擬試験問題の解説を含む） 6. 中間試験 7. 期末試験 | | 1 5 10 7 7 | |
| 後 期（ 15 週） | | 30 | |
| 8. 消化と吸収 9. 代謝 10. 体温 11. 排泄 12. 国試対策（演習問題の実施、模擬試験問題の解説を含む） 13. 中間試験 14. 期末試験 | | 6 6 5 6 7 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|-------------|------|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | 関係法規 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 伊達 徳昭 | | |
| 単位数・年間時間数 | 1 | 単位 30 | 時間以上 |
| 使用教科書 | 岡山ライトハウス 医療と社会 | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確認するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | あん摩マッサージ指圧師として必要な法令に関する基礎的な知識について座学授業を通して教授することにより、コンプライアンスに則った社会性豊かな施術者を育成することを念頭に授業を展開する。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要なあん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師の業務に関する法令について教授し、施術者として法に則した業務を行う能力と態度を修得させることを目的とする。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回授業の予習・復習を確実に行うことに重点を置き、その内容に関連する他の科目で学習した事項とのつながりをも考察するよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（ 15 週） | | 15 | |
| (1) 法律の基礎知識 (2) あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師に関する法律 ア. 免許 イ. 試験 ウ. 業務 エ. 罰則 | | 5 10 | |
| 後 期（ 15 週） | | 15 | |
| (3) 関係法規 ア. 医療関係法規 イ. 薬事関係法規 ウ. 衛生関係法規 エ. 社会福祉関係法規 オ. 社会保険関係法規 | | 15 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|--|---|------|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | 東洋医学概論 I | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 米田 裕和 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単 | 60 時 | 時間以上 |
| 使用教科書 | 基礎理学 I（東洋医学概論） | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年 2 回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確認するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | 講義を行う。各授業では、事前に課題を提示し、教科書予習、授業後のフィードバックを課す。各単元の授業後に確認テストを行う。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な東洋医学の概念、診断法及び治療法等の基本的事項について学習し、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の予習と復習に重点を置き、各単元の開始前に教科書の学習のポイントを確認する。また、事前に授業内容を教科書で確認し、授業に臨む。受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 30 | |
| (1) 東洋医学の基礎 ア 東洋医学の意義と沿革及び特色 イ 陰陽五行論 (2) 五臓六腑 ア 肝の位置・形状・生理 イ 心の位置・形状・生理 ウ 脾の位置・形状・生理 エ 肺の位置・形状・生理 オ 腎の位置・形状・生理 カ 心包の位置・形状・生理 キ 胆の位置・形状・生理 ク 小腸の位置・形状・生理 ケ 胃の位置・形状・生理 コ 大腸の位置・形状・生理 サ 膀胱の位置・形状・生理 シ 三焦の位置・形状・生理 ス 奇恒の腑の名称 | | 4 26 | |
| 後 期（ 15 週） | | 30 | |
| (3) 臟腑経絡論 ア 臟腑論 イ 経絡の概要 (4) 気血津液 ア 気 イ 血 ウ 津液 (5) 病因論 ア 内因 イ 外因 ウ 不内外因 エ 三毒説 (6) 病証論 ア 八綱病証 イ 臟腑病証 ウ 十二経病証 (7) 診断法 ア 四診の意義と概念 イ 望診の概要 ウ 聞診の概要 エ 問診の概要 オ 切診の概要 カ 証の概要 (8) 治療法 ア 手技療法 イ はり ウ きゅう エ 湯液 オ 養生 | | 6 4 6 14 0 0 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|--|--------|---|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | あま指基礎実習 I | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 伊達 徳昭 | | |
| 単位数・年間時間数 | 4 | 単位 120 | 時間以上 |
| 使用教科書 | な し | | |
| 使用参考書 | な し | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点もって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期には形成的評価を実施する。各評価は、試験に実習態度等を加味したものとす。 | | |
| 授業の概要 | あん摩マッサージ指圧師として必要なあん摩施術の基礎的な技術と知識を、実技授業を通して身につけさせるとともに、社会性豊かな施術者を育成することを念頭に授業を展開する。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要なあん摩施術に関する基礎的な知識と技能について教授し、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得させることを目的とする。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回授業で学習した事項手技等を復習し、確実に行えるようにする。また、その際には関係法令を遵守することを念頭に自己学習を進める。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（ 15 週） | | 45 | |
| ア 施術への導入 (ア) あん摩マッサージ指圧の意義と役割 (イ) 施術者としての心構え (ウ) 施術室の管理 (エ) 施術用具の取扱い (オ) 衛生管理（手指の消毒を含む） (カ) リスク管理 イ あん摩の基礎 (ア) 基本手技 (イ) 身体各部への施術 | | | 10 5 30 |
| 後 期（ 15 週） | | 45 | |
| オ 全身あん摩施術 (ア) 側臥位による全身施術 (イ) 腹臥位による全身施術 (ウ) 仰臥位による全身施術 (エ) 坐位に仕上げ ※指導上の留意事項 (1) 視覚障害の程度に応じた指導法を工夫する。 (2) あん摩マッサージ指圧施術について一連の流れを身につけさせる。 (3) 見学実習（施術所、病院、診療所、その他企業等）を計画し実施する。 (4) 他の科目との関連に留意する。 | | | 10 10 15 10 |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|--|-------|------|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | あま指基礎実習Ⅱ | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 藤井 徹 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 | 単位 60 | 時間以上 |
| 使用教科書 | あん摩マッサージ指圧実技（基礎編） | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期末、後期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期には形成的評価を実施する。各評価は、試験に実習態度等を加味したものとする。 | | |
| 授業の概要 | マッサージの基本手技を理解し、身体各部に施術できるようにする。また、施術によるリスクを理解し、安全な施術ができるようにする。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な施術に関する知識と技能について学習し、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（ 15 週） | | 30 | |
| (1) 施術への導入 ①施術者としての心構え ②マッサージの意義と役割 ③施術室の管理および実習用具の取扱い ④衛生管理（手指の消毒を含む） ⑤リスク管理 (2) マッサージの基礎 ①人体の区分 ②マッサージの基本手技（6種類） (3) 身体各部へのマッサージ ①上肢（手部、前腕、上腕） ②下肢（足部、下腿、大腿） | | 2 | 8 |
| | | 10 | 10 |
| 後 期（ 15 週） | | 30 | |
| (3) 身体各部へのマッサージ ③体幹（頭頸部、胸腹部、背部） ④上肢の各関節（手関節、肘関節、肩関節） ⑤下肢の各関節（足関節、膝関節、股関節） (4) その他のマッサージ ①オイルマッサージ ②結合式マッサージ ③リンパマッサージ | | 15 | 5 |
| | | 5 | 5 |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| 学 年 | 専門課程 1 年 | | | |
|--|---|----|------|------|
| 授業科目 | あま指基礎実習Ⅲ | | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 今井 進 | | 実務経験 | 有 |
| 単位数・年間時間数 | 2 | 単位 | 60 | 時間以上 |
| 使用教科書 | なし | | | |
| 使用参考書 | なし | | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点もって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期には形成的評価を実施する。各評価は、試験に実習態度等を加味したものとす。 | | | |
| 授業の概要 | 実習助手を配置する。実技練習は利用者同士でペアになり行うことを原則とする。指圧の基本手技を理解し、実践できるようにする。指圧による骨折等のリスクを理解し安全な施術、施術者の体位や姿勢に応じた施術ができるようにする。 | | | |
| 授業の目的 | 理療に関する実際的な知識と指圧施術に関する基礎的な技術について学習し、指圧施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を養う。 | | | |
| 自己学習の進め方 | 授業時間内での練習が主となるが、学習した基本手技については、授業以外の時間帯にも反復継続して訓練する。正確な手技や体位で行うことに注意し、技能の向上を図るように努める。 | | | |
| 授 業 内 容（計画） | | | | 予定H |
| 前 期（ 15 週） | | | | 30 |
| 1. 施術への導入 ①指圧の意義と役割 ②施術者としての心構え ③施術室の管理 ④施術用具の取扱い ⑤衛生管理（手指の消毒を含む） ⑥リスク管理 | | | | 10 |
| 2. 指圧施術上の基本的事項 ①押圧操作 ②押圧の三原則 ③母指圧の型 ④按摩手技の応用 | | | | 20 |
| 後 期（ 15 週） | | | | 30 |
| 3. 指圧の基本手技 ①押圧操作法 ②運動操作法 | | | | 10 |
| 4. 腹臥位の指圧 ①背部 ②殿部 ③下肢 ④後頭部・後頸部・肩上部 | | | | 10 |
| 5. 背臥位の指圧 ①腹部 ②下肢 ③頸部 | | | | 10 |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|------|------|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | はき基礎実習 I | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 米田 裕和 | | |
| 単位数・年間時間数 | 3 単 | 90 時 | 時間以上 |
| 使用教科書 | 鍼灸実技 基礎と臨床 オリエンス研究会 | | |
| 使用参考書 | 人体の構造と機能 解剖学（第2版 第14刷）、新版 経絡経穴概論 | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期には形成的評価を実施する。各評価は、試験に実習態度等を加味したものとす。 | | |
| 授業の概要 | 実技を行う。各授業では、事前に課題を提示し、教科書予習、授業後のフィードバックを課す。各単元の授業後に確認テストを行う。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な施術に関する知識と技能について学習し、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 日々の練習を行う。受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（ 15 週） | | 45 | |
| 1. 施術への導入 （ア）鍼施術の意義と役割（イ）施術者としての心構え （ウ）施術室の管理（エ）施術用具の基礎知識とその取扱い （オ）衛生管理（手指の消毒を含む）（カ）リスク管理（感染予防対策を含む） | | 6 | |
| 2. 施鍼の基礎 （ア）消毒法の実際（イ）前揉捏と後揉捏 （ウ）押手と刺し手（エ）管鍼法と撚鍼法 （オ）刺入法と抜針法 | | 6 | |
| 3. 基本手技 | | 12 | |
| 4. 身体各部への刺鍼 | | 12 | |
| 5. 主な経穴への刺鍼 | | 8 | |
| 評価のフィードバック | | 1 | |
| 後 期（ 15 週） | | 45 | |
| 1. 施術への導入 （ア）鍼施術の意義と役割（イ）施術者としての心構え （ウ）施術室の管理（エ）施術用具の基礎知識とその取扱い （オ）衛生管理（手指の消毒を含む）（カ）リスク管理（感染予防対策を含む） | | 2 | |
| 2. 施鍼の基礎 （ア）消毒法の実際（イ）前揉捏と後揉捏 （ウ）押手と刺し手（エ）管鍼法と撚鍼法 （オ）刺入法と抜針法 | | 2 | |
| 3. 基本手技 | | 12 | |
| 4. 身体各部への刺鍼 | | 16 | |
| 5. 主な経穴への刺鍼 | | 12 | |
| 評価のフィードバック | | 1 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|--|---------|----|
| 学 年 | 専門課程 1 年 | | |
| 授業科目 | はき基礎実習Ⅱ | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 水沼 健生 | 実務経験 | 有 |
| 単位数・年間時間数 | 2 単位 | 60 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | はりきゅう基礎実習Ⅰ 教官用指導マニュアル | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点もって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期には形成的評価を実施する。各評価は、試験に実習態度等を加味したものととする。 | | |
| 授業の概要 | 灸施術に必要な艾の鑑別、保存などや、施灸の種類、施灸の方法、施灸の実際までを経験し、修練をおこなう。個々の特性による課題についても、克服に向け個別の指導を行う。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な施術に関する知識と技能について学習し、施術を安全、適切かつ効果的に行う能力と技能を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 併進している解剖学や経絡経穴学などの知識を確認しながら取り組む。また、個々の特性にあった施術方法を実現するために、自身にとっての課題と向き合い必要なものを探求する。課題解決に必要なものやことについては指導教官と話し合い工夫する。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期 （ 15 週） | | 30 | |
| 艾 艾の種類 艾の品質と鑑別 艾の保存 線香 | | | 4 |
| 施灸の種類 有痕灸各種 無痕灸各種 | | | 5 |
| 施灸の実際 無痕灸 知熱灸・各種温灸・各種隔物灸 手順・線香の取り扱いと点火・燃焼後の灰処理・施灸の工夫・施灸の練習 | | | 21 |
| 後 期 （ 15 週） | | 30 | |
| 有痕灸 手順・灸点のおろし方・艾柱の形と大きさ・艾柱のひねり方・ 線香の取り扱いと点火・燃焼後の灰処理 施灸の工夫・施灸の練習 | | | 10 |
| 身体各部の施灸 灸の大きさ、壮数について 身体斜面への施灸・四肢への施灸・体幹への施灸 | | | 16 |
| 施灸時の接遇 声掛けを含むベッドサイドでの接遇について | | | 4 |
| ※視覚障害者の施灸に関してより高い水準での安全性と実効性を念頭におき 創意・工夫し、利用者個々の特性に合った補助具などを使用するなどの配慮に留意する | | | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| 学 年 | 専門課程2年 | | |
|-----------------------|---|---------|-----|
| 授業科目 | 人文科学概論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 有馬 伊津子 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単位 | 30 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし 適時プリント等を配布。 | | |
| 使用参考書 | 『改訂版 医療面接』（医道の日本社）『医療と社会』（盲学校…編纂委員会編） | | |
| 評価方法 | 前期、後期の2回の定期試験を実施し、その平均点を年間評価とする。（小数点以下は切り捨て） | | |
| 授業の概要 | 授業は利用者と講師とのやり取り（コミュニケーション）によって展開する。利用者の創作活動も取り入れる。利用者が自ら思考し、表現する活動も数多く取り入れたい。 | | |
| 授業の目的 | 人文科学諸分野の知識を深めるとともに、施術者として必要なコミュニケーション能力、及び、情報の適切な収集・処理に関する知識や技能を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | | 予定H |
| 前 期（ 15 週） | | | 15 |
| (1) 人文科学諸分野の知識と技能 | | | 3 |
| ア 日本語の特徴と機能 | | | |
| ウ 国文法と国語表現 | | | |
| エ 語彙 | | | |
| オ 言語生活 | | | |
| カ 日本文学と文学史 | | | |
| キ 古文と漢文 | | | |
| ケ 医療と日本語 など | | | |
| (2) コミュニケーションの知識と技能 | | | 3 |
| ア コミュニケーションの基本 など | | | |
| (3) 医療とコミュニケーション | | | 8 |
| ア 施術者としての態度 | | | |
| イ 医療における接遇 | | | |
| ウ 医療面接理論 など | | | |
| ○ 前期期末考査講評 | | | 1 |
| 後 期（ 15 週） | | | 15 |
| (1) 人文科学諸分野の知識と技能 | | | 3 |
| ア 日本語の特徴と機能 | | | |
| ウ 国文法と国語表現 | | | |
| エ 語彙 | | | |
| オ 言語生活 | | | |
| カ 日本文学と文学史 | | | |
| キ 古文と漢文 | | | |
| ケ 医療と日本語 など | | | |
| (2) コミュニケーションの知識と技能 | | | 3 |
| オ 各種情報の収集・整理・活用・発信 など | | | |
| (3) 医療とコミュニケーション | | | 8 |
| ア 施術者としての態度 | | | |
| イ 医療における接遇 | | | |
| ウ 医療面接理論 など | | | |
| ○ 後期期末考査講評 | | | 1 |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|--|------------------------|----|
| 学 年 | 専門課程 2年 | | |
| 授業科目 | 社会科学概論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 村上 初枝 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単位 | 30 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | 日本史A | | |
| 評価方法 | 前期、後期の2回の定期試験を実施し、その平均点を年間評価とする。（後期はレポート評価の場合あり） | | |
| 授業の概要 | 毎回、プリントを配布。時代背景を見ながら、歴史を学ぶ楽しさや人々がどのように生活していたのかをみていく。 | | |
| 授業の目的 | 日本史・地理・政治・経済等を通じて、現代社会にどのような課題や問題点があるのかをみていく。 | | |
| 自己学習の進め方 | 特に予習・復習の必要はないが、ニュースなどを参考にしながら現代社会にどのような問題があるのかを、意識することを心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 15 | |
| 授業概要と自己紹介 日本近現代史（開国から現代へ） 大日本帝国憲法と日本国憲法 前期まとめ 前期期末試験返却 | | 1 10 2 1 1 | |
| 後 期（ 15 週） | | 15 | |
| 日本近現代史（政治・経済・地理） 医療の歴史（近代からの感染症） 社会保障制度の動向 後期まとめ 後期期末試験返却 | | 6 2 5 1 1 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|-------------|--|-------|------|
| 学 年 | 専門課程2年 | | |
| 授業科目 | 自然科学概論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 小坂 昌博 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 | 単位 30 | 時間以上 |
| 使用教科書 | なし(プリントを配布する) | | |
| 使用参考書 | | | |
| 評価方法 | 前期、後期の2回の定期試験を実施し、その平均点を年間評価とする。（小数点以下は切り捨て） | | |
| 授業の概要 | <p>1. いろいろな健康現象や社会現象などを統計学的手法を駆使し、その背景や意味についての理解を深める。</p> <p>2. データベースについての理解を深め、「電子カルテ」の操作について習熟をはかる。</p> | | |
| 授業の目的 | <p>施術者として必要な自然科学諸分野の基礎的知識を教授し、物事を科学的に判断し、解決する能力と態度を修得する。</p> | | |
| 自己学習の進め方 | <p>毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。</p> | | |
| 授 業 内 容（計画） | | | 予定H |
| 前 期（ 15 週） | | | 15 |
| 1 | 授業の概要説明 | | 1 |
| 2 | 統計学はどう役立つか ※ 疫学的方法の事例 : がんの原因、水俣病の統計誤用、サリドマイド問題 | | 3 |
| 3 | クロス集計表を用いたデータ分析 ※ 関係性を表に表す | | 2 |
| 4 | 母集団と標本 ※ 平均と分散 | | 2 |
| 5 | 統計的仮説検定 ※ 独立性の検定、適合度の検定 | | 5 |
| 6 | 前期のまとめ | | 2 |
| 後 期（ 15 週） | | | 15 |
| 7 | 「データベース」ソフトの仕組み ※ カード型とリレーショナル型 | | 2 |
| 8 | 「電子カルテ」ソフトの仕組み ※ データベース構造からみた『カルテ』ソフトの見方 | | 2 |
| 9 | 「電子カルテ」の操作 ※ 入力と出力 ※ 操作時のトラブル解消法 | | 10 |
| 10 | 後期のまとめ | | 1 |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|--------------------------------------|-------|
| 学 年 | 専門課程 2 年 | | |
| 授業科目 | 保健体育 | 授業方法 | 実技・講義 |
| 科目担当者 | 細川 健一郎 | | |
| 単位数・年間時間数 | 1 単位 | 30 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期、後期の2回の定期試験を実施し、その平均点を年間評価とする。（小数点以下は切り捨て） | | |
| 授業の概要 | <ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害を配慮した運動・スポーツについて講義・実技を通して理解する。 ・健康と運動の関係について理解し、日常的な運動の実践につながる知識・技能を習得する。 ・スポーツ傷害について理解する。 | | |
| 授業の目的 | <p>施術者として必要な健康・安全や身体運動について教授し、健康の保持増進のための運動を実践させ、これを施術に応用する能力と態度を修得する。</p> | | |
| 自己学習の進め方 | <p>毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。</p> | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 15 | |
| (1) 体づくり運動 (2) 陸上競技 (3) 球技 (4) レクリエーションゲーム (5) 体育理論 (6) 保健理論 (7) スポーツ傷害 (8) その他のスポーツ *内容決定についての補足事項 内容については、上記内容を原則とするが、単位数、人数、年齢、性別、障害の程度、健康状態を配慮することに加え、施設や設備などの状況により決定する。 | | 2 3 2 2 1 2 0 3 | |
| 後 期（ 15 週） | | 15 | |
| (1) 体づくり運動 (2) 陸上競技 (3) 球技 (4) レクリエーションゲーム (5) 体育理論 (6) 保健理論 (7) スポーツ傷害 (8) その他のスポーツ *内容決定についての補足事項 内容については、上記内容を原則とするが、単位数、人数、年齢、性別、障害の程度、健康状態を配慮することに加え、施設や設備などの状況により決定する。 | | 2 2 0 5 0 0 2 4 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|---|--------------------------|----|
| 学 年 | 専門課程 2 年 | | |
| 授業科目 | 生理学Ⅱ | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 伊達 徳昭 | | |
| 単位数・年間時間数 | 3 単位 | 90 時間以上 | |
| 使用教科書 | 人体の構造と機能 生理学(医歯薬出版) | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期(中間・期末)、後期(中間・期末)の年4回の総括的評価を実施する。また、学年末成績は、各期の評価の相加平均とする。(小数点以下は切り捨て) | | |
| 授業の概要 | 1年次に修得した「生理学Ⅰ」を引き継ぎ、施術に必要な人体の構造と機能について学習する。また、授業を進めるにあたっては、関連科目や次年度履修する臨床実習等を念頭に、より実践的応用力を養成する。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な人体の機能について教授し、これを施術に応用できる能力と態度を養成する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回授業の予習・復習を確実にを行うことに重点を置き、その内容に関連する他の科目で学習した事項とのつながりをも考察するよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容 (計 画) | | 予 定 H | |
| 前 期 (15 週) | | 45 | |
| (6) 内分泌 (7) 生殖と成長 (8) 神経 ア 神経の一般 イ 中枢神経 ウ 末梢神経 エ 自律神経 | | 10 5 30 | |
| 後 期 (15 週) | | 45 | |
| (9) 筋 (10) 身体の運動 (11) 感覚 ア 感覚の一般 イ 体性感覚 ウ 内臓感覚 エ 特殊感覚 (12) 生体の防御機構 ア 身体活動の協調 イ 疾病に対する防御 (13) 身体活動の強調 | | 10 10 15 10 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|-----------------------|------|
| 学 年 | 専門課程 2 年 | | |
| 授業科目 | 病理学概論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 水沼 健生 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 | 単位 60 | 時間以上 |
| 使用教科書 | 疾病の成り立ちと予防Ⅱ 病理学概論 | | |
| 使用参考書 | 病理学概論 東洋療法学校協会編 | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点もって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確認するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | 疾病の基礎・病因・循環障害・退行性病変・進行性病変・炎症・腫瘍・免疫異常とアレルギーについて、前年度学習済みの解剖学、生理学との関連を説明し理解を深める | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な疾病の本態や各病変の概要について教授し、これを臨床に応用する知識と能力を修得させる。 | | |
| 自己学習の進め方 | 新しい単語だけを追うのではなく、過去の解剖学や生理学の単語や仕組みを振り返り、理解を深めるように取り組む | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 30 | |
| (1) 病理学の基礎 (2) 病因 内因/外因 (3) 循環障害 (4) 退行性病変 (5) 進行性病変 | | 2 8 8 6 6 | |
| 後 期（ 15 週） | | 30 | |
| (6) 炎症 概念 原因・経過と転帰 炎症の病変 (7) 腫瘍 形態 構造 発育と転移 腫瘍の診断 腫瘍の分類 (8) 免疫異常とアレルギー 免疫異常 アレルギー | | 10 12 8 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|---|---|----|
| 学 年 | 専門課程2年 | | |
| 授業科目 | 臨床医学総論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 土志田 武 | | |
| 単位数・年間時間数 | 3 単位 | 90 時間以上 | |
| 使用教科書 | 生活と疾病Ⅲ(臨床医学総論) 盲学校理療教科用図書編集委員会編 | | |
| 使用参考書 | 臨床医学総論 東洋療法学校協会編 | | |
| 評価方法 | 前期(中間・期末)、後期(中間・期末)の年4回の総括的評価を実施する。また、学年末成績は、各期の評価の相加平均とする。(小数点以下は切り捨て) | | |
| 授業の概要 | 施術者として必要な現代医学の診断及び治療に関する基礎的知識 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な現代医学の診断及び治療に関する基礎的知識について教授し、これを施術に応用する能力と態度を習得させる。 | | |
| 自己学習の進め方 | 授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容 (計 画) | | 予 定 H | |
| 前 期 (15 週) | | 45 | |
| (1) 診察の概要 ア 診察の意義 イ 診察の一般的心得 ウ 関連用語の理解 エ 診察方の種類 オ 診察の順序 カ 記録の目的と内容 (2) 診察の方法 ア 問診(医療面接) イ 視診 ウ 打診 エ 聴診 | | 1 44 | |
| 後 期 (15 週) | | 45 | |
| (2) 診察の方法 オ 触診 カ 測定法 キ 神経系の検査 (3) 臨床検査法 ア 一般検査 イ 生化学検査 ウ 生理学的検査及び画像診断の概要 (4) 治療学 ア 治療の意義と分類 イ 薬物療法 ウ 食事療法 エ 理学療法 オ その他の療法 (5) 臨床心理 ア 患者の心理 イ 心理学的検査・評価方法 ウ カウンセリング エ その他 | | 15 20 5 5 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|------------------------|--|---------|----|
| 学 年 | 専門課程 2 年 | | |
| 授業科目 | 理療臨床医学各論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 上野 博之 | | |
| 単位数・年間時間数 | 3 単位 | 90 時間以上 | |
| 使用教科書 | 生活と疾病3（臨床医学各論）第3版 盲学校理療強化用図書編集委員会 編 | | |
| 使用参考書 | 臨床医学各論（東洋療法学校協会編） | | |
| 評価方法 | 前期(中間・期末)、後期(中間・期末)の年4回の総括的評価を実施する。また、学年末成績は、各期の評価の相加平均とする。(小数点以下は切り捨て) | | |
| 授業の概要 | 西洋医学の立場から、各診療科別に疾患の原因、症状、検査・診断、治療等の知識を学習する。その中でもあはき臨床で遭遇しやすい疾患を精選して指導する。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な現代医学の立場からみた系統別疾患の診断及び治療に関する基礎的知識について教授し、これを施術に応用する能力と態度を修得させる。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（ 15 週） | | 45 | |
| 1 運動器疾患の病態生理および診断、治療 | | | 20 |
| ア 関節疾患 | | | |
| イ 骨代謝性疾患 | | | |
| ウ 骨疾患 | | | |
| エ 筋疾患 | | | |
| オ 形態異常 | | | |
| カ 脊椎疾患 | | | |
| キ 整形外科領域の外傷 | | | |
| 2 神経系疾患の病態生理および診断、治療 | | | 20 |
| ア 脳血管疾患 | | | |
| イ 脳・脊髄感染症 | | | |
| ウ 脳・脊髄腫瘍 | | | |
| エ 大脳変性疾患 | | | |
| オ その他の変性疾患 | | | |
| カ 末梢神経疾患 | | | |
| その他（試験のまとめ・講評など） | | | 5 |
| 後 期（ 15 週） | | 45 | |
| 3 その他各科の疾患の病態生理及び診断、治療 | | | 10 |
| ア 麻酔科 | | | |
| イ ペインクリニック | | | |
| イ 胃・十二指腸疾患 | | | |
| ウ 一般外科 | | | |
| 4 消化器疾患の病態生理および診断、治療 | | | 15 |
| ア 食道疾患 | | | |
| イ 胃・十二指腸疾患 | | | |
| ウ 腸疾患 | | | |
| エ 腹膜疾患 | | | |
| オ 肝・胆道疾患 | | | |
| カ 膵臓疾患 | | | |
| 5 呼吸器疾患 | | | 15 |
| 6 循環器疾患 | | | 5 |
| その他（試験のまとめ・講評など） | | | 5 |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|--|-----------------------------------|----|
| 学 年 | 専門課程 2 年 | | |
| 授業科目 | 東洋医学概論Ⅱ | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 小田 剛 | | |
| 単位数・年間時間数 | 3 単 位 | 90 時 間 | 以上 |
| 使用教科書 | 基礎理療学Ⅰ 東洋医学概論 改訂第6版第2刷 | | |
| 使用参考書 | 基礎理療学Ⅰ 東洋医学概論 改訂第6版 付録版 | | |
| 評価方法 | 前期(中間・期末)、後期(中間・期末)の年4回の総括的評価を実施する。また、学年末成績は、各期の評価の相加重平均とする。(小数点以下は切り捨て) | | |
| 授業の概要 | この科目は東洋医学の基礎理論、生理観、疾病観などに触れ、東洋医学の基礎について理解を深めるものです。さらには診断論・治療論も学習し施術に応用する能力と資質等を養います。 | | |
| 授業の目的 | あん摩・マッサージ・指圧・鍼・灸師として必要な東洋医学の概念、診断法及び治療法等の基本的事項について学習し、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を習得することを目標とします。 | | |
| 自己学習の進め方 | 講義は教科書を基にまた必要ならば参考書を用いて進めます。そのため講義後は必ず教科書等を精読して復習し、内容の理解につとめてください。理解できないところがあれば、教科書を調べ、それでも解決できなければ、次の講義までに担当教官に質問し確認してください。 | | |
| 授 業 内 容 (計 画) | | 予 定 H | |
| 前 期 (15 週) | | 45 | |
| オリエンテーション (1) 東洋医学の基礎理論 (2) 東洋医学の生理観 (3) 東洋医学の疾病観 (4) 診断論 (5) 国試対策・・・(期末試験対策、演習問題の実施、模擬試験問題の分析を含む) | | 3 3 12 12 12 3 | |
| 後 期 (15 週) | | 45 | |
| (6) 治療論 (7) 東洋医学の沿革 (8) 医療面接における東洋医学の使い方 (9) 臨床における弁証の立て方 (10) 臨床に向けての、弁治の実際 (11) 国試対策・・・(期末試験対策、演習問題の実施、模擬試験問題の分析を含む) | | 12 3 9 6 12 3 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|--|------------|----|
| 学 年 | 専門課程 2 年 | | |
| 授業科目 | 経絡経穴概論Ⅱ | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 木村 秀伯 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単 位 | 60 時 間 | 以上 |
| 使用教科書 | 経絡経穴概論 第2版（日本理療科教員連盟・社団法人 東洋療法学校協会 編 教科書執筆小委員会 著） | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確認するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | 1年次に修得した経絡経穴概論Ⅰの内容を発展させるとともに、取穴法では経穴人形、解剖模型を活用し、生体観察をも取り入れながらより効果的な施術ができるようにする。 | | |
| 授業の目的 | はり師、きゅう師として必要な経絡経穴の基本的事項について教授し、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得させる。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、生体観察をも取り入れる。また、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（15 週） | | 30 | |
| (1) 経絡経穴の概要 ア 十二正経 イ 奇経八脈 ウ 要穴の概要 エ 取穴法 (2) 経 穴 ア 任脈・督脈の経穴名と部位 イ 肺経の経穴名と部位 ウ 大腸経の経穴名と部位 エ 胃経の経穴名と部位 オ 脾経の経穴名と部位 カ 心経の経穴名と部位 キ 小腸経の経穴名と部位 その他（試験のまとめ・講評など） | | 10 | 15 |
| 後 期（15 週） | | 30 | |
| (2) 経 穴 ク 膀胱経の経穴名と部位 ケ 腎経の経穴名と部位 コ 心包経の経穴名と部位 サ 三焦経の経穴名と部位 シ 胆経の経穴名と部位 ス 肝経の経穴名と部位 (3) 経穴の応用 ア 要穴の応用 イ 組み合わせ穴 ウ 奇 穴 (4) 経絡経穴の現代医学的研究 ア 経絡の研究 イ 経穴の研究 その他（試験のまとめ・講評など） | | 15 | 5 |
| | | 5 | 5 |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| 学 年 | 専門課程 2 年 | | |
|---|---|---|----|
| 授業科目 | あま指応用実習 I | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 土志田 武 ・ 藤井 徹 | | |
| 単位数・年間時間数 | 4 単位 | 120 時間以上 | |
| 使用教科書 | | | |
| 使用参考書 | あん摩マッサージ指圧実技（基礎編） | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、各評価は、試験に実習態度等を加味したものとする。 また、臨床実習前試験を実施し、その評価も加味する。 | | |
| 授業の概要 | 1年次に修得した按摩の基礎的技術を発展させ、按摩応用実習Ⅱ等の科目と連携しながら、各種疾患や症状の総合的な診察や治療方など。 また、次年度の臨床実習に向けて、必要となる態度と知識技術など。 | | |
| 授業の目的 | 個々の利用者が、施術者として必要な按摩の応用的施術に関する知識と技能を身につけ、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得することを目標とする。 また、臨床実習前試験を実施し評価を行う。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 60 | |
| (1) 分野別の治療法 ア 健康医学分野 イ 産業医学分野 ウ スポーツ医学分野 | | 30 20 10 | |
| 後 期（ 15 週） | | 60 | |
| エ 老年医学分野 (2) 臨床入門 ア リスク管理 イ 衛生管理 ウ 患者への対応 エ 診察の進め方 オ 適否の判定 (3) 臨床実習前試験等 ア 環境整備（設備・器具等の準備及び片付け） イ 医療面接 ウ 身だしなみ、医療接遇・マナー エ 身体診察と施術計画 オ 患者への説明と同意 カ 施術の実践 キ 安全な施術操作とリスク管理 ク 施術結果の把握 ケ 施術後の対応（患者への説明・配慮） コ 施術中の器具の整理整頓と施術環境への配慮 サ 臨床前評価試験 (4) 日常遭遇しやすい主な症候・疾患に対する診察と施術 ア 運動器系（肩こり、頸肩腕痛、腰下肢痛、肩・膝の関節痛） イ 呼吸器・循環器系（咳嗽、高血圧症） ウ 消化器系（胃炎、便秘・下痢） エ 婦人科系（月経異常、更年期障害） オ その他 | | 8 適宜実施 適宜実施 10 8 2 10 12 8 2 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|--|---------|----|
| 学 年 | 専門課程2年 | | |
| 授業科目 | あま指応用実習Ⅱ | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 今井 進・木村 秀伯 | 実務経験 | 有 |
| 単位数・年間時間数 | 2 単位 | 60 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期には形成的評価を実施する。各評価は、試験に実習態度等を加味したものである。 | | |
| 授業の概要 | 実技実習を基本とし、ダブルテーチングで実施する。実技練習は利用者同士でペアになり行うことを原則とする。あま指施術に応用できる機能訓練等について理解し、実践できるようにする。転倒等のリスクを理解し安全な施術。姿勢や動きに応じた施術ができるようにする。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な応用的施術に関する知識と技能について学習し、施術を適切かつ効果的に実践できる能力と態度を養う。また、臨床実習前に施術実技試験等を行い、円滑に臨床実習を開始できるようにする。 | | |
| 自己学習の進め方 | 授業時間内での練習が主となるが、学習した内容については、授業以外の時間帯にも反復継続して訓練し、技能の向上を図るように努める。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（ 15 週） | | 30 | |
| 1. 臨床入門 ア リスク管理 イ 衛生管理 ウ 患者への対応 エ 診察の進め方 オ 適否の判定 | | 5 | |
| 2. 日常遭遇しやすい主な症候・疾患に対する運動療法 ア 腰痛体操 イ 五十肩体操 ウ 肩こり体操 エ 膝痛に対する大腿四頭筋訓練 オ その他の治療体操（健康十巧など） | | 20 | |
| 3. 臨床実習前試験等 コミュニケーション、徒手検査法（頸部・腰部） | | 5 | |
| 後 期（ 15 週） | | 30 | |
| 4. 関連する手技療法 ア 推拿 イ 関節モビリゼーション ウ リフレクソロジー | | 10 | |
| 5. 施術に応用する物理療法 ア 温熱療法 イ 電気療法 ウ 牽引療法 エ その他 | | 5 | |
| 6. 介護予防・機能訓練指導に必要な知識と技術 ア 運動機能評価 イ 包括的高齢者運動トレーニング ウ 介護に必要な基礎的事項 杖の種類と処方、杖歩行、車椅子紹介・操作 | | 15 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|--|----------|----|
| 学 年 | 専門課程 2 年 | | |
| 授業科目 | はき応用実習 I | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 上野 博之 ・ 小田 剛 | | |
| 単位数・年間時間数 | 4 単位 | 120 時間以上 | |
| 使用教科書 | 鍼灸実技 基礎と臨床 オリエンタリオン研究会 | | |
| 使用参考書 | | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年 2 回の総括的評価の平均点もって年間評価とする。(小数点以下は切り捨て)なお、中間期には形成的評価を実施する。各評価は、試験に実習態度等を加味したものとする。 また、臨床実習前試験を実施し、その評価も加味する。 | | |
| 授業の概要 | 1 年次に修得した、はりきゅうの基礎的技術を発展させ、はりきゅう応用実習 II と連携しながら、各種疾患や症状の総合的な診断や治療ができるようにする。 また、次年度の臨床実習に向けた能力と態度を身につける。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要ははり、きゅうの応用的施術に関する知識と技能を身につけ、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得する。 また、学年末に臨床実習前試験を実施し評価を行う。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容 (計 画) | | 予 定 H | |
| 前 期 (15 週) | | 60 | |
| (1) 分野別の治療法 ア 健康医学分野 イ 産業医学分野 ウ スポーツ医学分野 エ 老年医学分野 (2) 臨床入門 ア リスク管理 イ 衛生管理 ウ 患者への対応 エ 診察の進め方 オ 適否の判定 (3) 日常遭遇しやすい主な症候・疾患に対する診察と施術 ア 運動器系（肩こり、頸肩腕痛、腰下肢痛、肩・膝の関節痛） イ 呼吸器・循環器系（咳嗽、高血圧症） ウ 消化器系（胃炎、便秘・下痢） エ 婦人科系（月経異常、更年期障害） オ その他 | | 10 | |
| | | 30 | |
| | | 20 | |
| 後 期 (15 週) | | 60 | |
| (4) 鍼施術・特殊鍼法 ア 小児鍼法 イ 皮内鍼法 ウ 灸頭鍼法 エ 刺絡鍼法 オ 鍼通電療法 カ その他の特殊鍼法 (5) 臨床実習前試験等 ア 環境整備（設備・器具等の準備及び片付け） イ 医療面接 ウ 身だしなみ、医療接遇・マナー エ 身体診察と施術計画 オ 配穴及び取穴法 カ 患者への説明と同意 キ 施術の実践 ク 安全な施術操作とリスク管理 ケ 施術結果の把握 コ 施術後の対応（患者への説明・配慮） サ 施術中の器具の整理整頓と施術環境への配慮 | | 10 | |
| | | 50 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| 学 年 | 専門課程 2 年 | | |
|-----------------------------------|---|------------|----|
| 授業科目 | はき応用実習Ⅱ | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 森定 真・米田 裕和 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単位 | 60 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期には形成的評価を実施する。各評価は、試験に実習態度等を加味したものである。 | | |
| 授業の概要 | この科目は、基礎から臨床への橋渡しとなりますので、臨床で遭遇する各種疾患の鑑別診断を行い、的確な治療を行う能力を身につけます。 | | |
| 授業の目的 | 身体各部位（常用穴）への施灸に際しての注意点や灸による過誤、副作用についても理解を深め、医療人としての基本的な態度を養うことも目標とします。 | | |
| 自己学習の進め方 | この実習で身につける知識・技術には、解剖学や経絡経穴概論で履修する学習内容も含まれます。関連する事項については授業中に指摘しますので、次の実習までに準備学習をしておいて下さい。授業時間外において、各自が人体施灸の練習する場合は、教官立ち合いの元で行うようにし、実習中に説明した注意事項を十分に守り、実習で習得した範囲内で練習するようにして下さい。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（ 15 週） | | 30 | |
| 1 施術への導入（オリエンテーションを含む） | (1) 施術室の管理 (2) 施術用具の基礎知識とその取り扱い (3) 衛生管理（手指の消毒を含む） (4) リスク管理（感染予防対策を含む） | 4 | |
| 2 施灸の基礎 | (1) 艾の鑑別 (2) 線香の取扱いと艾柱への点火 | 2 | |
| 3 基本的施灸法及び特殊灸法 | (1) 知熱・透熱灸法 (2) 隔物灸法 (3) 温灸器具を用いた灸法 | 8 | |
| 4 身体各部、主な経穴への施灸 | | 15 | |
| 5 期末試験 | | 1 | |
| 6 評価のフィードバック | | 1 | |
| 後 期（ 15 週） | | 30 | |
| 7 主な症候・疾患に対する診察（運動器疾患を中心に） | | 5 | |
| 8 主な症候・疾患に対する診察と施術（施灸による全身調整法を含む） | | 20 | |
| 9 臨床入門 | (1) リスク・衛生管理 (2) 患者への対応 (3) 診察の進め方 (4) 適否の判定 | 4 | |
| 10 期末試験 | | 1 | |
| 11 評価のフィードバック | | 1 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|--|---|----|
| 学 年 | 専門課程 3年 | | |
| 授業科目 | 衛生学・公衆衛生学 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 水沼 健生 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単 位 | 60 時 間 | 以上 |
| 使用教科書 | 「衛生学・公衆衛生学」盲学校理療科図書編纂委員会 | | |
| 使用参考書 | 「衛生学・公衆衛生学」東洋療法学校協会編 | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点もって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確認するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | 衛生学・公衆衛生学の意義・健康の保持増進と生活・食生活と健康・生活環境と公害・産業保健・精神保健・母子保健・生活習慣病対策・感染症対策・消毒法・疫学・保健統計を学び、過去からの変遷、現在の課題、これからの展望についても考える | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な健康の保持、衛生の基礎について学習し、これを施術に応用する知識と能力を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 感染症やその対策、統計などを様々な媒体を通じて情報を収集し公衆衛生を体感する。また実技などの消毒などの衛生についてリンクさせる。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 30 | |
| 1. 衛生学・公衆衛生学の意義 2. 健康の保持増進と生活 3. 食生活と健康 4. 生活環境と公害 | | 3 8 10 9 | |
| 後 期（ 15 週） | | 30 | |
| 4. 生活環境と公害 5. 産業保健 6. 精神保健 7. 母子保健 8. 生活習慣病対策 9. 感染症対策 10. 消毒法 11. 疫学 12. 保健統計 | | 3 4 4 3 4 4 4 2 2 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|--|------------|----|
| 学 年 | 専門課程 3 年 | | |
| 授業科目 | 臨床医学各論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 今井 進 | | |
| 単位数・年間時間数 | 3 単 位 | 90 時 間 以 上 | |
| 使用教科書 | 盲学校理療強化用図書編纂委員会 編 『生活と疾病3（臨床医学各論） 第3版』 | | |
| 使用参考書 | 臨床医学各論 東洋療法学校協会編 | | |
| 評価方法 | 前期(中間・期末)、後期(中間・期末)の年4回の総括的評価を実施する。また、学年末成績は、各期の評価の相加平均とする。(小数点以下は切り捨て) | | |
| 授業の概要 | 西洋医学的立場からみた系統別疾患について、病態生理および診断、治療に関する基礎的知識にいて学習する。各疾患の概要を理解することを目標に置き、他科目で習得した内容と、個々の疾患の内容を関連づけながら学習をすすめる。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な現代医学の立場からみた系統別疾患の診断及び治療に関する基礎的知識について教授し、これを施術に応用する能力と態度を養う。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回の授業の復習に重点を置き、受けた授業の内容を振り返るとともに、キーワードとなる用語については、意味も含めしっかり記憶する。また、関係する科目の内容との関連も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容 (計 画) | | 予 定 H | |
| 前 期 (15 週) | | 45 | |
| 1 循環器疾患 2 血管系疾患 3 血液・造血器疾患 4 腎・泌尿器疾患 5 内分泌疾患 6 男性生殖器疾患 7 代謝・栄養疾患 8 その他(試験のまとめ・講評など) | 6 6 6 6 6 4 6 5 | | |
| 後 期 (15 週) | | 45 | |
| 9 膠原病 膠原病類似疾患 10 皮膚科疾患 11 眼科疾患 12 耳鼻科疾患 13 婦人科疾患 14 精神疾患 15 小児科疾患 16 感染症 17 その他(試験のまとめ・講評など) | 6 5 5 5 5 5 4 5 5 | | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--------------|---|-------|------|
| 学 年 | 専門課程 3年 | | |
| 授業科目 | 医療概論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 伊達 徳昭 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 | 単位 30 | 時間以上 |
| 使用教科書 | 岡山ライトハウス 医療と社会 | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点もって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確認するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | あん摩マッサージ指圧師として必要な現代の医療に関する状況や社会保障制度に関する基礎的な知識や医療倫理について座学授業を通して教授することにより社会性豊かな施術者を育成することを念頭に授業を展開する。 | | |
| 授業の目的 | 現代の医療制度と社会保障制度及び職業倫理について基礎的知識を修得させるとともに、社会性豊かな施術者としての心構えと態度を育成する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回授業の予習・復習を確実に行うことに重点を置き、その内容に関連する他の科目で学習した事項とのつながりをも考察するよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 15 | |
| 1 現代の医学と医療 | | | |
| （1）医療と社会 | | 4 | |
| ・疾病構造の変化 | | | |
| （2）医療経済 | | 3 | |
| ・国民医療費の動向 | | | |
| ・高齢社会と介護問題 | | | |
| （3）医療従事者 | | 4 | |
| ・医療従事者とチーム医療 | | 4 | |
| （4）医療・福祉施設 | | | |
| ・介護施設 | | | |
| 後 期（ 15 週） | | 15 | |
| 2 社会保障制度 | | 7 | |
| ・医療保険の仕組み | | | |
| ・公費負担医療 | | | |
| ・介護サービス行政 | | | |
| 3 医療倫理 | | 8 | |
| ・医療の倫理 | | | |
| ・医療倫理教育 | | | |
| ・施術者としての倫理 | | | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|---------------------------------|------|
| 学 年 | 専門課程 3年 | | |
| 授業科目 | 東洋医学臨床論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 森定 真 | | |
| 単位数・年間時間数 | 5 | 単位 150 | 時間以上 |
| 使用教科書 | 臨床理学（理療臨床論） | | |
| 使用参考書 | 東洋医学臨床論（はりきゅう編及びあま指編） | | |
| 評価方法 | 前期(中間・期末)、後期(中間・期末)の年4回の総括的評価を実施する。また、学年末成績は、各期の評価の相加平均とする。（小数点以下は切り捨て） | | |
| 授業の概要 | 臨床で遭遇する代表的な疾患に対して症状および所見から病態を把握し、疾患の鑑別と効果的な治療方法について理解を深めます。 | | |
| 授業の目的 | 学習した内容を施術に応用する能力と態度を養い、科学的根拠のある医療、サービスの提供を実現することを目標とします。 | | |
| 自己学習の進め方 | この科目で習得する知識・技術は、すでに履修済みの解剖学、臨床医学総論、経絡経穴概論、東洋医学概論、理療臨床医学各論の知識を必要としますので、各科目の復習をしておいてください。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 78 | |
| 1. オリエンテーション 2. 治療論（総論、治療原則） 3. 症候別治療（肩こり、頸肩腕痛、肩関節痛、上肢痛、腰下肢痛、膝痛、運動麻痺、頭痛、顔面痛） 4. 症候別治療（顔面麻痺、歯痛、眼精疲労、鼻閉、脱毛症、めまい、耳鳴り、咳嗽、喘息、胸痛、腹） 5. スポーツ医学と理療施術 6. 国試対策（演習問題の実施、模擬試験問題の解説を含む） 7. 中間試験 8. 期末試験 | | 1 10 20 20 15 12 | |
| 後 期（ 15 週） | | 72 | |
| 9. 症候別治療（悪心、便秘異常、月経異常、排尿障害、インポテンツ、高血圧症） 10. 疾患別治療（低血圧症、食欲不振、肥満、発熱、のぼせと冷え、不眠、疲労と倦怠、発疹） 11. 高齢者に対する理療施術 12. 国試対策（演習問題の実施、模擬試験問題の解説を含む） 13. 中間試験 14. 期末試験 | | 20 20 5 27 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|--|---------|--|
| 学 年 | 専門課程 3年 | | |
| 授業科目 | 臨床診察学 | 授業方法 | 講義・実技 |
| 科目担当者 | 米田 裕和 | | |
| 単位数・年間時間数 | 1 単位 | 30 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | 臨床理療学（あはき師用東洋医学臨床論）、生活と疾病Ⅱ臨床医学総論、 | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確認するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | 講義、実技を行う。各授業では、事前に課題を提示し、教科書予習、授業後のフィードバックを課す。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な施術に関する知識と技能について学習し、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | | 予定H |
| 前 期（ 15 週） | | | 15 |
| (1) 医療面接の進め方の一般 ア 医療面接の意義と概要 イ 医療面接の内容 ウ 医療面接による臨床推論 (2) 生体観察を含む身体診察の進め方の一般 ア 視診の進め方 イ 打診の進め方 ウ 聴診の進め方 エ 触診の進め方 (3) 筋・骨格系症状の診察 ア 肩こりの医療面接と身体診察 イ 頸肩腕痛の医療面接と身体診察 ウ 腰下肢痛の医療面接と身体診察 エ 肩関節痛の医療面接と身体診察 オ 膝関節痛の医療面接と身体診察 (4) 神経系症状の診察 ア 感覚障害の医療面接と身体診察 イ 運動機能障害の医療面接と身体診察 ウ 自律神経症状の医療面接と身体診察 | | | 2 4 8 1 |
| 後 期（ 15 週） | | | 15 |
| (1) 医療面接の進め方の一般 ア 医療面接の意義と概要 イ 医療面接の内容 ウ 医療面接による臨床推論 (2) 生体観察を含む身体診察の進め方の一般 ア 視診の進め方 イ 打診の進め方 ウ 聴診の進め方 エ 触診の進め方 (3) 筋・骨格系症状の診察 ア 肩こりの医療面接と身体診察 イ 頸肩腕痛の医療面接と身体診察 ウ 腰下肢痛の医療面接と身体診察 エ 肩関節痛の医療面接と身体診察 オ 膝関節痛の医療面接と身体診察 (4) 神経系症状の診察 ア 感覚障害の医療面接と身体診察 イ 運動機能障害の医療面接と身体診察 ウ 自律神経症状の医療面接と身体診察 | | | 1 1 6 6 |
| まとめ | | | 1 |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|------------------|-------|
| 学 年 | 専門課程 3年 | | |
| 授業科目 | 臨床取穴学 | 授業方法 | 講義・実技 |
| 科目担当者 | 米田 裕和 | | |
| 単位数・年間時間数 | 1 単位 | 30 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | 人体の構造と機能 解剖学、新版 経絡経穴概論 | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点もって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確認するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | 講義、実技を行う。各授業では、事前に課題を提示し、教科書予習、授業後のフィードバックを課す。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な施術に関する知識と技能について学習し、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | 受けた授業の内容を振り返るとともに、関係する科目の内容との連携も考えるよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 15 | |
| (1) 取穴法の基礎と生体観察 ア 経脈の流注と取穴姿勢、取穴方向 イ 切経と取穴技術 (2) 選穴法の基礎 ア 選穴法の概要 イ 選穴法の原則 (3) 配穴法の基礎 ア 配穴法の概要 イ 配穴法の原則 (4) 鍼灸施術形式における配穴法の運用 ア 正経治療法 イ 奇経治療法 ウ 太極療法 エ 中医学弁証による治療法 オ その他の施術形式 | | 4 4 4 3 | |
| 後 期（ 15 週） | | 15 | |
| (1) 取穴法の基礎と生体観察 ア 経脈の流注と取穴姿勢、取穴方向 イ 切経と取穴技術 (2) 選穴法の基礎 ア 選穴法の概要 イ 選穴法の原則 (3) 配穴法の基礎 ア 配穴法の概要 イ 配穴法の原則 (4) 鍼灸施術形式における配穴法の運用 ア 正経治療法 イ 奇経治療法 ウ 太極療法 エ 中医学弁証による治療法 オ その他の施術形式 | | 2 2 2 8 | |
| まとめ | | 1 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|--------------------|----|
| 学 年 | 専門課程 3年 | | |
| 授業科目 | 地域理療と理療経営 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 小田 剛 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単位 | 60 時間以上 | |
| 使用教科書 | 地域理療と理療経営（社会鍼灸あん摩学序説）第3版 | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確認するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | この科目は、理療と関わる地域社会や法制度の動向に触れるとともに、理療経営に関する基礎知識について理解を深めます。また学習した内容で卒業後の就職先や開業に応用するための能力と教養が養われ、就労・社会復帰の実現の基礎となります。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な地域社会における理療の役割、医療・福祉のあり方、及び理療の経営に必要な知識について教授し、施術者並びに経営者としての能力と態度を修得することを目標とします。 | | |
| 自己学習の進め方 | 講義は教科書を基にまた必要ならば資料を作成しそれを用いて進めます。そのため講義後は必ず教科書等を精読して復習し、内容の理解につとめてください。理解できないところがあれば、教科書を調べ、それでも解決できなければ、次の講義までに担当教官に質問し確認してください。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 30 | |
| (1) 地域社会と理療 (2) 少子高齢社会の現状と課題 (3) 社会保障制度の体系 (4) 理療業務と社会保険制度 | | 5 5 10 10 | |
| 後 期（ 15 週） | | 30 | |
| (5) 理療経営の基礎 (6) 理療経営の展開 (7) 機能訓練型デイサービスの起業 (8) 理療と就労 | | 4 6 10 10 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|--|-------|------|
| 学 年 | 専門課程3年 | | |
| 授業科目 | あま指の歴史と理論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 伊達 徳昭 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 | 単位 60 | 時間以上 |
| 使用教科書 | 日本ライトハウス 基礎保健医療Ⅱ | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 前期末、後期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確保するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | あん摩マッサージ指圧師として必要な施術に関する基礎的な技術と知識を、座学授業を通して身につけさせるとともに、社会性豊かな施術者を育成することを念頭に授業を展開する。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要なあん摩施術に関する基礎的な知識と技能について教授し、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得させることを目的とする。 | | |
| 自己学習の進め方 | 毎回授業の予習・復習を確実にを行うことに重点を置き、その内容に関連する他の科目で学習した事項とのつながりをも考察するよう心がける。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 日 | |
| 前 期（15 週） | | 35 | |
| 第1章 あん摩マッサージ指圧の意義 | | 3 | |
| 第2章 あん摩 | | 9 | |
| 第1節 あん摩の意義と沿革 | | | |
| 第2節 あん摩の基本手技 | | | |
| 第3節 あん摩の効果 | | | |
| 第3章 マッサージ | | 6 | |
| 第1節 マッサージの意義と沿革 | | | |
| 第2節 マッサージの基本手技とその生理作用 | | | |
| 第3節 運動法とその生理作用 | | | |
| 第4節 結合織マッサージ | | | |
| 第5節 リンパマッサージ | | | |
| 第4章 指圧 | | 6 | |
| 第1節 指圧の意義と沿革 | | 2 | |
| 第5章 その他の関連する治療法 | | 4 | |
| 第6章 あん摩マッサージ指圧の臨床応用 | | 5 | |
| 1. 刺激量 | | | |
| 2. 感受性 | | | |
| 3. あん摩マッサージ指圧の適応 | | | |
| 4. あん摩マッサージ指圧の禁忌 | | | |
| 5. 適否の判断基準 | | | |
| 後 期（15 週） | | 30 | |
| 第7章 リスク管理 | | 5 | |
| 第1節 リスク管理の基本 | | | |
| 第2節 あん摩マッサージ指圧の過誤 | | | |
| 第3節 あん摩マッサージ指圧における感染症対策 | | | |
| 第8章 あん摩マッサージ指圧の基礎理論 | | 10 | |
| 第1節 刺激の伝達 | | | |
| 第2節 中枢内の神経伝導路 | | | |
| 第3節 反射 | | | |
| 第4節 治療効果と反射 | | | |
| 第5節 治療的作用と生体反応 | | | |
| 第9章 | | 7 | |
| 第1節 身体組織、器官への影響 | | | |
| 第2節 自律神経および内分泌系への影響 | | | |
| 第3節 血液への影響 | | | |
| 第4節 免疫機構への影響 | | | |
| 第10章 関連学説 | | 8 | |
| 第1節 ホメオスタシスの学説 | | | |
| 第2節 ストレス学説 | | | |
| 第3節 圧自律神経反射の学説 | | | |
| ○指導上の留意事項 | | | |
| (1) あん摩マッサージ指圧の歴史や沿革、治効理論の基礎的内容について、臨床効果という観点から十分理解させる。 | | | |
| (2) リスク管理については具体例を取り上げ、その防止と対処法について十分理解させる。 | | | |
| (3) 他の科目との関連に留意する。 | | | |
| (4) 高等課程では、基礎あはき学で教授する。 | | | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|--|------------------------|------|
| 学 年 | 専門課程 3年 | | |
| 授業科目 | はりきゅうの歴史と理論 | 授業方法 | 講義 |
| 科目担当者 | 土志田 武 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 | 単位 60 | 時間以上 |
| 使用教科書 | 基礎理療学Ⅲ 理療理論（オリエンス研究会著） | | |
| 使用参考書 | | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の年2回の総括的評価の平均点をもって年間評価とする。（小数点以下は切り捨て）なお、中間期にはそれぞれの到達度を確保するための形成的評価を実施する。 | | |
| 授業の概要 | 鍼灸の歴史及び鍼灸の基礎理論・臨床効果・鍼灸のリスク管理など | | |
| 授業の目的 | はり師、きゅう師として必要な鍼灸の基礎理論及び臨床効果について教授し、科学的視点から施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得させる。また、鍼灸の歴史的役割や、治療方法の歴史的変遷を学ぶことを通し、治療者としての自覚をいっそう高め、また、効果的な治療を用いる能力を習得させる。 | | |
| 自己学習の進め方 | 授業の復習に重点を置くと共に、得た知識を鍼灸実技に応用できるよう勤める。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 30 | |
| 鍼灸理論概要 鍼灸の歴史 鍼灸施術の臨床応用 鍼灸の作用機序 関連学説と鍼灸施術 | | 2 3 4 13 8 | |
| 後 期（ 15 週） | | 30 | |
| 鍼灸の各組織・器官に及ぼす影響 鍼灸施術の特殊治効理論 鍼灸治療の分野と目的 | | 14 11 5 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|--|---|------------|----|
| 学 年 | 専門課程 3 年 | | |
| 授業科目 | あま指臨床実習 I | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 今井 進 ・ 土志田 武 | 実務経験 | 有 |
| 単位数・年間時間数 | 2 | 単 位 | 90 |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | プリント | | |
| 評価方法 | 前期期末、後期期末の各期に、実習態度、施術に関する知識や技能、施術の記録などを考慮して総合的に評価する。なお、前期中間、後期中間に形成的評価を行う。 | | |
| 授業の概要 | 施術協力者に対する臨床実習を基本とする。診察、評価および施術適否の判定。あん摩マッサージ指圧施術の実施。施術記録への記載。施術過誤の防止と対処について実践する。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要なあん摩マッサージ指圧臨床に関する知識と技能について総合的に習得させ、施術を適切かつ効果的に行う実践の能力と態度を養う。 | | |
| 自己学習の進め方 | 施術時までには担当患者のカルテを確認し、適切な施術ができるように努める。施術後は患者の症状について、他教科で学習した内容に照らし復習し、実践的な知識、技能の向上に努める。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予定H | |
| 前 期（ 15 週） | | 45 | |
| 1. 施術者としての基本 (ア) 施術者としての心得 (イ) 衛生管理 (ウ) リスク管理 (エ) 患者への対応 (オ) 診察の進め方 (カ) 適否判定 | | 5 | |
| 2. 設備や備品の管理と清潔の保持 | | 5 | |
| 3. 施術の実践 (ア) 診察、評価及び施術適否の判定 (イ) あん摩マッサージ指圧施術の実施 (ウ) 施術過誤の防止と対処 (エ) 正しいカルテの記入 | | 35 | |
| 後 期（ 15 週） | | 45 | |
| 4. 施術の実践 (ア) 診察、評価及び施術適否の判定 (イ) あん摩マッサージ指圧施術の実施 (ウ) 運動・物理療法の併用 (エ) 施術過誤の防止と対処 (オ) 正しいカルテの記入 | | 40 | |
| 5. 実習のまとめ (ア) カンファレンスの実施 | | 2 | |
| 6. 臨床家による講座 | | 3 | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|------|------------------|
| 学 年 | 専門課程 3年 | | |
| 授業科目 | あま指臨床実習Ⅱ | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 藤井 徹・木村秀伯 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 | 単位 | 60 時間以上 |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | 配布プリント | | |
| 評価方法 | 前期末、後期末の各期に、実習態度、施術に関する知識や技能、施術の記録などを考慮して総合的に評価する。なお、前期中間、後期中間に形成的評価を行う。 | | |
| 授業の概要 | 施術協力者に対する臨床実習を基本とする。診察、評価および施術適否の判定。あん摩マッサージ指圧施術の実施。施術記録への記載。施術過誤の防止と対処について実践する。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要なあん摩マッサージ指圧臨床の施術に関する知識と技能について教授し、施術を適切かつ効果的に行う能力と態度を修得させる。 | | |
| 自己学習の進め方 | 施術時まで担当患者のカルテを確認し、適切な施術ができるように努める。施術後は患者の症状について、他教科で学習した内容に照らし復習し、実践的な知識、技能の向上に努める。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | | 予定H |
| 前 期 （ 15 週） | | | 30 |
| 1. 施術者としての基本 (ア) 施術者としての心得 (イ) 衛生管理 (ウ) リスク管理 (エ) 患者への対応 (オ) 診察の進め方 (カ) 適否判定 2. 設備や備品の管理と清潔の保持 3. 施術の実践 (ア) 診察、評価及び施術適否の判定 (イ) あん摩マッサージ指圧施術の実施 (ウ) 施術過誤の防止と対処 (エ) 正しいカルテの記入 | | | 5 5 20 |
| 後 期 （ 15 週） | | | 30 |
| 4. 施術の実践 (ア) 診察、評価及び施術適否の判定 (イ) あん摩マッサージ指圧施術の実施 (ウ) 運動・物理療法の併用 (エ) 施術過誤の防止と対処 (オ) 正しいカルテの記入 5. 実習のまとめ (ア) カンファレンスの実施 6. 臨床家による講座 | | | 25 2 3 |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|--|---------|----|
| 学 年 | 専門課程 3年 | | |
| 授業科目 | はき臨床実習 I | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 小田 剛 ・ 森定 真 | | |
| 単位数・年間時間数 | 2 単位 | 90 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 態度・接遇・技術・知識・考察（カルテ記載）を加味し前期（期末）、後期（期末）の2回の総括的評価を行う。また前期・後期の中頃に各1度ずつ形成的評価もおこなう。 | | |
| 授業の概要 | 施術者としての心得や接遇、設備や備品の管理と清潔の保持、消毒法、施術の実践までを包括的に実施する。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な施術に関する知識と技能について学習し、施術を安全で適性かつ効果的に行う能力を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | これまで学習した専門基礎科目・専門科目の知識を再確認し患者に望む。また、様々な患者について普段から検査法や施術法のシュミレーションを行う。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期 （ 15 週） | | 60 | |
| オリエンテーション | | 10 | |
| 施術者としての基本 （ア）施術者としての心得 （イ）患者への対応 | | 10 | |
| 設備や備品の管理と清潔の保持 | | 10 | |
| 消毒 （ア）施術器具の消毒 （イ）手指及び施術部位の消毒 | | 10 | |
| 施術の実践 （ア）診察、評価及び施術適否の判定 （イ）鍼灸施術の実施 （ウ）運動・物理療法の併用 | | 20 | |
| 後 期 （ 15 週） | | 30 | |
| 施術の実践 （ア）診察、評価及び施術適否の判定 （イ）鍼灸施術の実施 （ウ）運動・物理療法の併用 | | 20 | |
| 実習のまとめ （ア）ケースレポートの作成 （イ）カンファレンスの実施 | | 10 | |
| ※施術者としての心構え・患者へ接遇・消毒などについては施術の実践中にも適宜指導を実施する。 | | | |

令和2年度授業計画書（シラバス）

| | | | |
|---|---|---------|----|
| 学 年 | 専門課程 3年 | | |
| 授業科目 | はき臨床実習Ⅱ | 授業方法 | 実技 |
| 科目担当者 | 上野 博之・水沼 健生 | 実務経験 | 有 |
| 単位数・年間時間数 | 2 単位 | 90 時間以上 | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 使用参考書 | なし | | |
| 評価方法 | 態度・接遇・技術・知識・考察（カルテ記載）を加味し前期（期末）、後期（期末）の2回の総括的評価を行う。また前期・後期中頃に各1度ずつ形成的評価もおこなう。 | | |
| 授業の概要 | 施術者としての心得や接遇、設備や備品の管理と清潔の保持、消毒法、施術の実践までを包括的に実施する。 | | |
| 授業の目的 | 施術者として必要な施術に関する知識と技能について学習し、施術を安全で適性かつ効果的に行う能力を修得する。 | | |
| 自己学習の進め方 | これまで学習した専門基礎科目・専門科目の知識を再確認し患者に望む。また、様々な患者について普段から検査法や施術法のシュミレーションを行う。 | | |
| 授 業 内 容（計画） | | 予 定 H | |
| 前 期（ 15 週） | | 60 | |
| オリエンテーション | | 10 | |
| 施術者としての基本 （ア）施術者としての心得 （イ）患者への対応 | | 10 | |
| 設備や備品の管理と清潔の保持 | | 10 | |
| 消毒 （ア）施術器具の消毒 （イ）手指及び施術部位の消毒 | | 10 | |
| 施術の実践 （ア）診察、評価及び施術適否の判定 （イ）鍼灸施術の実施 （ウ）運動・物理療法の併用 | | 20 | |
| 後 期（ 15 週） | | 30 | |
| 施術の実践 （ア）診察、評価及び施術適否の判定 （イ）鍼灸施術の実施 （ウ）運動・物理療法の併用 | | 20 | |
| 実習のまとめ （ア）ケースレポートの作成 （イ）カンファレンスの実施 | | 10 | |
| ※施術者としての心構え・患者へ接遇・消毒などについては施術の実践中にも適宜指導を実施する。 | | | |